

#### 四 利劔卽是彌陀名號

「雨に出て踏まれな庭の蝸牛、角あればとて身をな忘れそ」蝸牛の角はいくら延ばしたかとて、物に觸つたら却つて引込んで了ふ。よし引込まずとも、踏みつけて仕舞ふ人の下駄には叶はない。我々の自力我慢の角もそんなもので、今の世に直指人心見性成佛と力んでみても、六大無碍卽事而眞と氣張つてみても、一心三觀法界無碍など口で云うてみても、所詮まさかの間にはあはぬ。我慢を張る者に眞實の勇者のあつた例がない。

『和語燈』に曰く「貪瞋煩惱のかたきにしばらくられて、三界の樊籠にこめられたる我等を、彌陀悲母の御心ざしふかくして、名號の利劔をもちて、生死のきづなをきり、本願の要船を苦界のなみにうかべて、彼岸につけ給ふべし」と。然り名號は利劔である。利劔は名號である。「利劔は卽ち彌陀の號なり、一聲稱念するに罪皆除こる」如何にも偉い切れ味ではなからうか。

昔は武士に新刀だめしと云ふことがあつたさうな。新に買った刀の切れ味を試みるために、罪人の首や胴を斬る。中には辻斬と云つて往來の人を斬つたり、又は乞食の集まつてゐる所へ行つて、罪も怨もない者に對して殺生する不心得な武士もあつたのださうです。これも其の類でありましたらう。或る大名の子の出過者が、或時人に瞞されて一振の太刀を買ひ求め「この太刀はどんな鎧でも、通すことが出来る」と逢ふ人毎に見せびらかして自慢して居た。併しまだ自分から試したことのないのは残念だと思ひ、それから河原の乞食小屋へ毎夜のやうに出かけて、首でも肩でも當り次第に斬付けるが、出過ぎの癖に根が大の臆病者で、それが斬れたか斬れないか、録々見届けもせず逃げ歸るのであります。腕も鈍いが刀も自慢する程のものではない。とはいへいつも一人では頼ない、今度こそ目に物見せてやらうと、供を二人つ

れて或る月のほのぐらい夜、河原をさして出かけました。すると向うの方にひとり、一人の乞食が、前後も知らず寝入つて居る。大名の子は太刀を引抜いて、拔足差足に歩み寄り、両手に太刀を振り上げ、乞食の腰ごろ見かけて、眞二つに切つて離し、一丁ばかりも逃げ去つた。

何だか胸がどやついて足が震へるのを、やつと観念して「胴切と云ふものは、腕のよく定まらない人には出来るものでないと、父が云はれたが、見よあの奴今胴切にしてやつた、デモ此の刀の鋭いこと。明日友達に話したら、羨ましがつて嫉むだらう」なんて、勝手な熱を吐くと、「珍しい太刀もあつたものです。併し今一度おいでになつて、奴の様を御覽なつては如何」と供の者が申すので、恐いながらも「ウンさうだぐ」と、三人が恐るく先の處へ近寄らうとすると、さつき胴切にされた筈の乞食が、むくく起き上つて寝惚けた聲で「何者だ、また叩きに來たのか」と云ふ。叩くとは驚く、切つた筈なのに。「ヤアまた來たか、昨夜おれを擲つた武士が」聲に應じて陸續乞食がやつて來て、「おれも一昨日の晩なぐられた跡が、こんなに瘤になつて居る。」「おれも蚯蚓腫になつて居る。今夜は三人居るでないか。」「こんな武士は癖になるから叩き殺せ」と大勢に怒鳴られて、武士の方が泣聲を出し「人殺しくヤア人殺し」。

こんなことでは全くお話にならぬ。我等が貪瞋煩惱の仇敵、生死流轉のきづなは、自力雑行の鑄刀では駄目、駄目なのを見込んで御成就下さつたのが如來の本願南無阿彌陀佛。

惡道に引く業障の綱を切る、劔なりけり彌陀の名號

業障の綱を切る刀は、同時に我等を助け活かす劔である。されば煩惱のための殺人刀は、同時に菩提のための活人劔であります。